

児童の「伝えたい」思いを高める授業づくりへの一考察

－動機付けに着目して－

指導教官 佐藤 美智子

四万十市立中村南小学校 教諭 尾崎 紗矢

【研究の概要】

グローバル化が進展している社会において、多様な価値観をもった人々と共生するためには、主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することが不可欠であり、英語でコミュニケーションを図る楽しさを体験させることが重要である。そこで、小学校段階では、英語を使ってコミュニケーションを図ることに対する「動機付け」を高める必要があるのではと考えた。他教科等との連携や指導の工夫、継続的な形成評価を行うことで、児童の「伝えたい」思いやコミュニケーションを図ろうとする態度にどのような変化が見られるか、その可能性を探るために行った授業実践の内容と結果をまとめた。

【キーワード】 小学校外国語科 動機付け 「伝えたい」 思い

1. はじめに

1.1 研究の背景

グローバル化の進展が進む社会において、外国語によるコミュニケーション能力は、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている。こうした社会状況を踏まえ、『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』では、「コミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を育成すること」を目指し、「知識及び技能」の習得、「思考力、判断力、表現力等」の育成、「学びに向かう力、人間性等」の涵養の3つの柱に沿って具体が示された。「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関わる目標には、「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」と明記されており、「児童が言語活動に主体的に取り組むことが外国語によるコミュニケーションを図る素地・基礎となる資質・能力を身に付ける上で不可欠」であるとしている。

しかし、『小学校外国語活動実施状況調査の結果』によると、91.5%の児童が「英語が使えるようになりたい」と回答しているにも関わらず、約3割の児童は英語や授業に対して否定的な回答をしていることがわかる。また、「英語の授業の中で楽しいと思うこと」については、「英語で友達や外国人の先生と会話すること」と回答している児童は6割程度に留まっている。置籍校の児童にも同様の項目で意識調査を行ったところ、外国語の授業に対して否定的な回答をした児童は18.5%であり、友達やALTと英語で会話をするに対しては約2割の児童が否定的な回答をしていた。「主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」ことを目標とした外国語教育において、こうした実態は大きな懸念材料であり、改善が求められる。

また、今回の学習指導要領改定のキーワードの一つに「カリキュラム・マネジメント」があり、「何ができるようになるか」という視点で教育課程全体を見渡し、教科等相互の連携を図り、関係性を深めながら、教育課程を編成していくことが求められている。

1.2 先行研究の概観

1.2.1 「主体的」に「コミュニケーションを図る」とは

広辞苑(1998)によると、「主体的」とは「ある活動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な立場において行うさま。(p.1280)」

様式 4

とある。また、「コミュニケーション」について、樋口 (2019)は、「小学校の言葉の教育においては、言葉は意味を伝える気持ちを運ぶなど人とつながる道具であり、コミュニケーションとは『言葉を使って相手と思いを伝え合うこと』である。(p. 79)」と述べ、言葉と心のキャッチボールと捉えていることから、「主体的にコミュニケーションを図る」とはコミュニケーションを図りたいという自らの意思に基づいて、英語を使って思いや気持ちを相互に伝え合おうとすることであると考える。

1.2.2 主体的に取り組む態度を促すために必要なこと

石川(2017)によると、Dornyei(1998)は「強い動機づけがあれば、言語適正と学習環境の両方において相当の問題があったとしてもそれを帳消しにできる。(p.146)」と述べている。つまり、児童の動機付けを高めることで、英語が苦手な児童も目標に向かって意欲的に学習に取り組むことができることがわかる。また、中島(2017)によると、学習の最初の段階で「学習への期待感」を高めることと、「学習への必要感」を作ることが不可欠であるという。さらに、大城(2017)は、「主体的な学びにおいては、子どもが「やってみたい」「楽しい」と思うことが重要となる。(p.110)」と述べている。

1.2.3 英語でコミュニケーションを図るために必要なこと

柳瀬(2015)によると、神経科学ダマシオは、「からだ」こそが「こころ」の基盤であり、「あたま」は「こころ」を言語で拡張したものにはすぎないという。「あたま」だけの丸暗記訳語は意味の亡骸にすぎず、それを唱えたからといって、身体実感が湧き上がってくるものではないため、使う英語は、「からだ」と「こころ」に即したものでなければならない。さらに、三浦(2006)は、コミュニケーション活動について、「人間的価値のある意味の授受まで高め、生徒の交流欲求を満たすべきである。」と述べている。児童が心を動かし、言葉に思いを乗せながら、自分や相手にとって価値のある情報を伝達し合えるコミュニケーション活動にすることが大切である。

1.2.4 学習指導要領と他教科等との連携を図った授業づくりについて

『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』の「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の配慮事項には、「言語活動で扱う題材は、児童の興味・関心に合ったものとし、国語科や音楽科、図画工作科など、他教科等で児童が学習したことを活用したり、学校行事で扱う内容と関連付けたりするなどの工夫をすること」とあることから、他教科等との連携を図った授業づくりの重要性が伺える。外国語活動や外国語科と他教科等に関連させる「よさ」について、佐藤(2017)は、「他教科で得た学びが子どもの安心感や自信につながる」「双方向に関連させることにより学びが一層深まる」の2点を挙げている。

1.2.5 継続的な形成評価

『文部科学省 児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』では、学習評価について、「教師の指導改善につながるものにしていくこと」「児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと」「これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと」と記されており、指導と評価の一体化を実現することが求められている。松沢(2011)は、「授業内評価においては、最終的な成績をつけることと同時に、学習者の普段の学びを支援し、目標へ導いていくことが、より重要な目的となります。その点で、授業内評価では「継続的で形成的な評価」の役割が重要となります。(p.61)」と述べている。継続的に形成的な評価を行い、指導者の指導改善に活かすとともに、児童の学びの意欲の向上や学習改善に繋げることが大切である。

2 研究目的

2.1 研究の目的

前述した研究背景と先行研究の概観を踏まえ、「主体的にコミュニケーションを図る児童」の育成

のためには、まず「伝えたい」思いを児童に持たせることが重要であると考えた。そこで、本研究の目的は、児童の「伝えたい」思いを高める授業の在り方を探ることとし、次の仮説を立て、実践・考察を行った。なお、授業実践の対象は、置籍校の第5学年 36名である。

〈仮説〉動機付けに着目して、他教科等との連携を図った単元を構築するとともに、指導の工夫や継続的な評価を行うことにより、児童の「伝えたい」思いに変化が生まれるか。

3 研究内容

3.1 授業実践 I

①他教科等との関連を図った単元構想

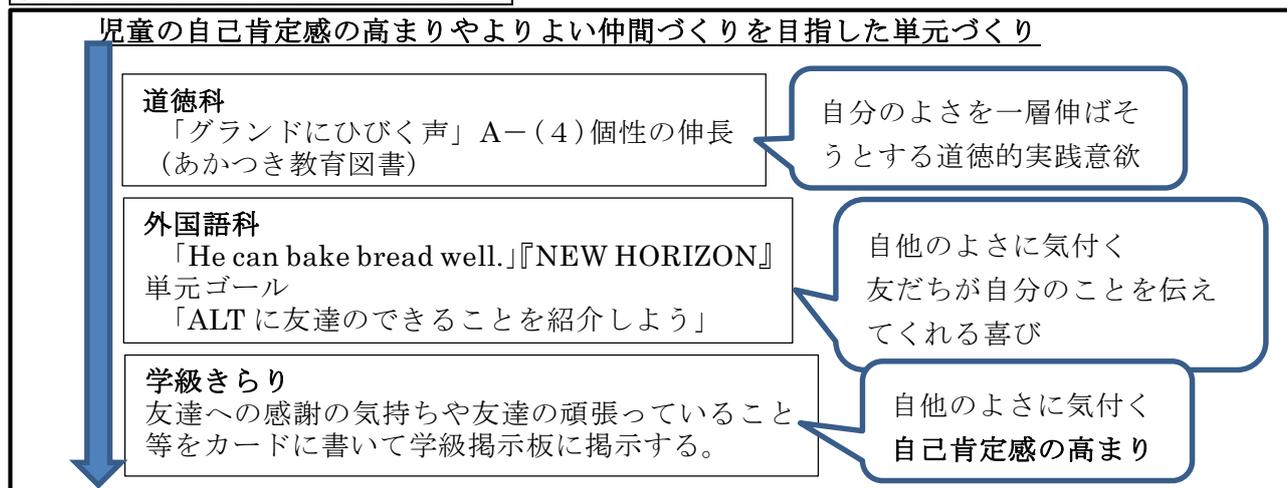


図1 授業実践 I の単元構想

②動機付けを高めるための指導の工夫

表1 授業実践 I の指導計画

6/21	①動作を表す語や、できる・できないという表現を理解する。
6/23	②動作を表す語や、できることやできないことについて聞き取ることができる。
6/28	③できることやできないことについて尋ねたり答えたりすることができる。
6/30	④自分のできることやできないことを伝え合うことができる。
7/5	⑤第三者について、できることやできないことを聞き取ることができる。
7/7	⑥友達のできることを、自分の情報を付け加えながら話すことができる。
7/12	⑦友達のことをよく知ってもらうために、できることやできないことについて自分の考えや気持ちなどを含めて話そうとする。

1)外国語の授業に対する動機付けを高める指導の工夫

ミュージックビデオを使った歌う活動

第1時の終わりに、「We Can Be Together」という歌を紹介した(鳴門市林崎小学校作成のもの)。毎時間の授業の導入時に歌うことで、外国語の授業に対する意欲の高まりに繋がることを期待した。また、児童と歌詞の意味を考えたり、ジェスチャーで表現しながら歌ったりすることで、英語の歌を歌う楽しさを感じることができると考えた。

身近な人を扱った Small Talk

授業の導入で Small Talk の活動を取り入れ、筆者や外国語専科・ALT のできることやできない

様式 4

ことを伝えたり、置籍校の先生のできることやできないことを「Who am I?クイズ」や「Who is she?クイズ」等で紹介したりした。毎時間先生たちの新しい情報を知ること、外国語の授業が児童にとってわくわくする時間になってほしいと考えた。また、Small Talk を通して教師や友達と英語でやり取りすることで、気持ちが解れ安心してコミュニケーションを図ることができる雰囲気づくりに繋がると思った。

よりよい仲間づくりに繋げるための活動の工夫

校内の先生のできることを聞かせるだけでなく、児童にも “I can run fast. Raise your hands.” と手を挙げさせたり、“Who can swim fast?” と尋ねたりした。そうすることで、「～さんできるで」「～さん走るが早いで」と、友達同士で認め合える場に繋がることを期待した。英語を使った活動を通して児童が自尊感情を高めたり他者への理解を深めたりすることで、コミュニケーションを図る「楽しさ」を実感させたいと考えた。

2) 「伝えたい」思いを高める指導の工夫

必然性のある単元ゴールの設定や共有の仕方

第5時の導入で、「Who is he/she?クイズ」を行い、He と She の意味について理解させた後、単元ゴール「友達のできることを ALT に紹介しよう」を共有した。まず、ALT に、筆者が5年生担任のことを紹介し、単元の活動への見通しを持たせた。その後、児童に ALT が8月に帰国することや、「帰るまでにみんなのことをもっと知りたい」という ALT の思いを伝え、「ALT に友達のことを知ってもらおう」という終末の活動を児童と共に設定した。

紹介するペア

紹介する友達は、友達関係に配慮し、普段から仲の良い友達を紹介することにした。安心して発表練習ができると同時に、「友達のすごいところをたくさん伝えたい、知ってほしい」という思いがより高まるとともに、活動が活性化すると考えた。

伝え方の工夫

友達のことを ALT により知ってもらうために、クロムブックで実際の映像を撮影したのを見せながら紹介することにした。実際の映像を使用することで、児童は「友達のすごさを伝える」目的意識をより一層もちながら、映像を撮影したり発表の練習をしたりできると考えた。

③動機付けを維持するための評価

導入で生まれた動機を維持するためには、継続的な形成的評価やそれに応じた指導改善を行う必要がある。評価方法としては、筆者による行動観察と児童による自己評価(振り返りシート)を中心に行った。行動観察を通して、児童が活動内容に興味・関心を持っているか、「伝えたい」思いをもって学習に取り組んでいるか等を評価しながら授業実践を行った。振り返りシートには、「この単元は楽しそうだった」「友達のできることを伝えたいと思った」等の項目を設定し、単元への意欲や児童の「伝えたい」思いの高まり等を測った。また、「今日の授業は楽しかった」という項目も設定し、児童が毎時間楽しさや満足感、達成感を感じながら学習を進めているか評価を行うようにした。自由記述の欄も設定し、児童がどのような思いで学習を進めているのかを把握することで、授業改善に繋がった。

3.2. 授業実践Ⅱ

①他教科等との関連を図った単元構想

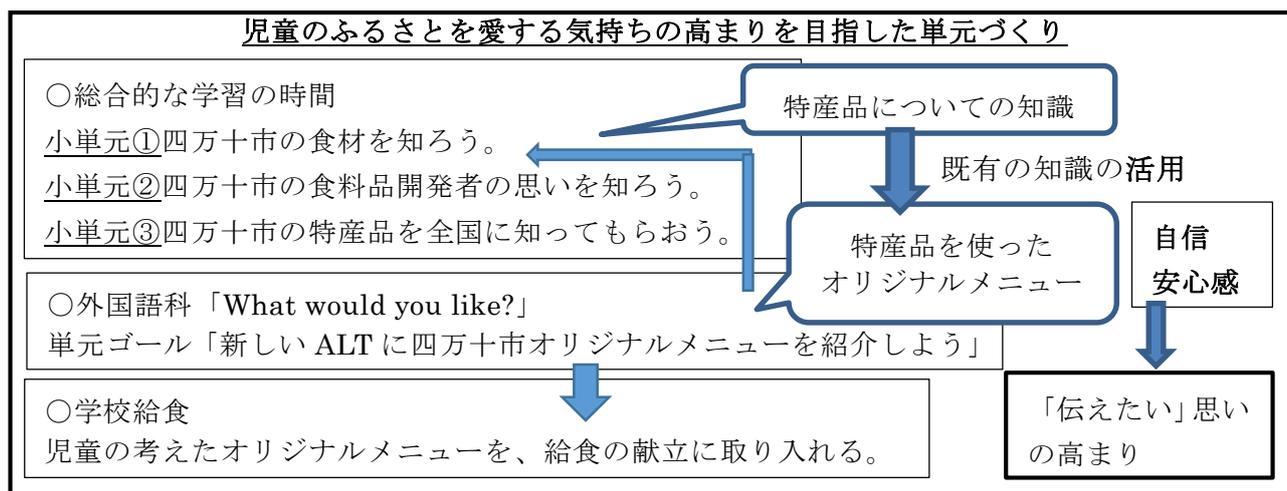


図 2 授業実践Ⅱの単元構想

②動機付けを高めるための指導の工夫

表 2 授業実践Ⅱの指導計画

6/21	①動作を表す語や、できる・できないという表現を理解する。
6/23	②動作を表す語や、できることやできないことについて聞き取ることができる。
6/28	③できることやできないことについて尋ねたり答えたりすることができる。
6/30	④自分のできることやできないことを伝え合うことができる。
7/5	⑤第三者について、できることやできないことを聞き取ることができる。
7/7	⑥友達のできることを、自分の情報を付け加えながら話すことができる。
7/12	⑦友達のことをよく知ってもらうために、できることやできないことについて自分の考えや気持ちなどを含めて話そうとする。

1) 「伝えたい」思いをより高める指導の工夫

必然性のある単元ゴールの設定と共有の仕方

単元ゴールを、「新しく四万十市に来た ALT にふるさとのオリジナルメニューを紹介しよう」と設定した。紹介する相手が会ったことのない ALT であること、アメリカから来たばかりであり四万十市のことを全く知らないこと等から、英語でふるさとのオリジナルメニューを紹介する必然性を生むことができると共に、児童は特産品を「教えてあげたい」という思いで学習に取り組むことができると考えた。また、第1時の最後には ALT からの動画を見せ、単元ゴールを共有し、活動の見通しを持たせるようにした。動画視聴後には、四万十市の特産品について学習している N 小学校5年生だけへのお願いであることを伝え、児童の「やりたい」「教えてあげたい」という気持ちをさらに高めることへと繋げた。また、児童に「どうする？」と投げかけることで自分たちの意志でやっているという認識をもたせ、学習意欲の向上を図った。単元ゴールを共有する際に撮影した動画の ALT の発話内容を以下に示す。



Hello. I am Eli. I'm a new ALT.
 I came to Shimanto yesterday.
 I want to know more about Shimanto food.
 I heard it is very delicious.
 Please tell me about Shimanto food and food menu for me.
 Thank you.

図 3 授業で使った動画の写真

様式 4

児童の思いで学習を進める手立て

単元ゴール共有後、児童が知っている四万十市の特産品をたくさん挙げさせ、それを基にカードを作成することで、児童の既有的知識を大切にしながら学習を進めた。振り返りカードの中に、「生姜を紹介したい」「煮物のメニューを考えたい」等との記述があった際には、食材カードやメニューの中に追加した。本当に「伝えたい」食材やメニューを紹介できるようにすることで、児童の学習意欲の向上を図った。また、学習を進める中で、ALTに質問したいという児童も出てきたため、動画を撮影して質問する等、児童主体で学習が進むようにした。

「伝えたい」思いを維持するための手立て

単元ゴールを共有した次の時間(第2時)の導入で徳島県の特産品を話題にした Small Talk を行い、特産品への興味・関心を惹きつけるようにした。また、ALTに初めて来校してもらう時間を第6時に設定することで、「ALTと早く話したい」「ALTが来るまでに英語を習得しよう」という思いで学習に取り組むことができると考えた。さらに、第7時では、アメリカのランチメニューについて紹介してもらうことで、「自分たちもALTに伝えたい」という思いを高めるようにした。

伝わった達成感を味わわせる工夫

食材の買い物をする時間(第6時)には、ALTの2人にも参加してもらうことで、英語を使って会話をする楽しさを味わわせるようにした。また、オリジナルメニューを紹介する際にも、グループ毎にALTに評価をしてもらった。オリジナルメニューについての感想と児童の英語に対する評価をしてもらうことで、自分たちの英語を褒めてもらった嬉しさを感じると同時に、「伝わった」成功体験を積ませるようにした。

③動機付けを維持するための評価

授業実践Iと同様に、筆者による行動観察や児童による自己評価(振り返りカード)を基に、授業改善を図った。振り返りシートも、授業実践Iと同様に項目を設定し、「伝えたい」思いの高まり等を測った。

また、新しく、「この英語が知りたい」という欄を設け、児童が授業や日常の中で「知りたい」と思った単語や表現を自由に書けるようにした。児童が知りたいと思った単語や表現を筆者が伝えることで、表現にも広がり生まれ、「伝えたい」内容が「伝えることができる」ようになるのではないかと考えた。さらに、「今日学習したことはどんな場面で使えそうですか?」という欄も設けた。毎日書くのではなく、授業を通して他の場面で使えそうと思った時だけ書くよう促した。学習した表現が生活のどのような場面で使えそうか考えることで、授業外においても英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度へと繋がってほしいと考えた。

4. まとめ

4.1 実践研究の結果と考察

4.1.1 意識調査より

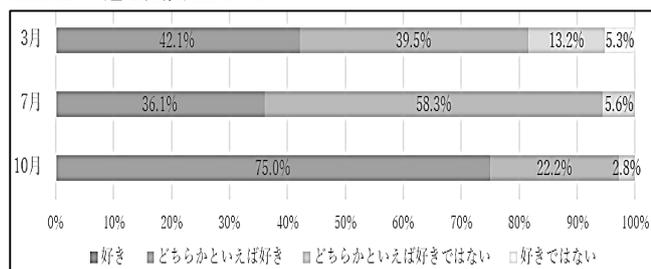


図4 外国語の授業が好きですか

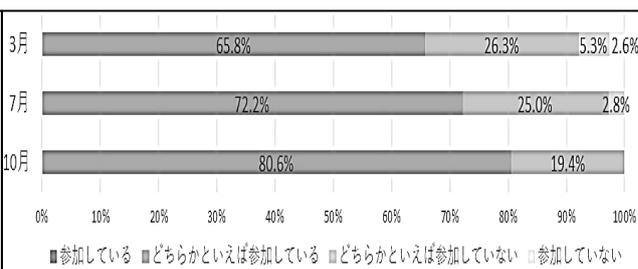


図5 外国語の授業に進んで参加していますか

様式 4

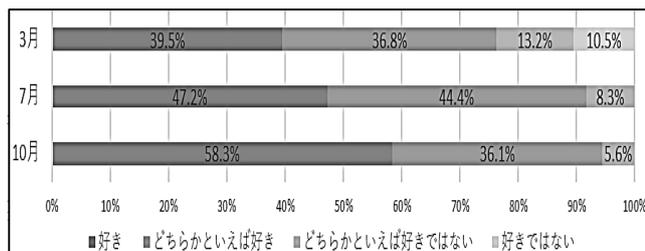


図6 授業の中で友達と会話をする事

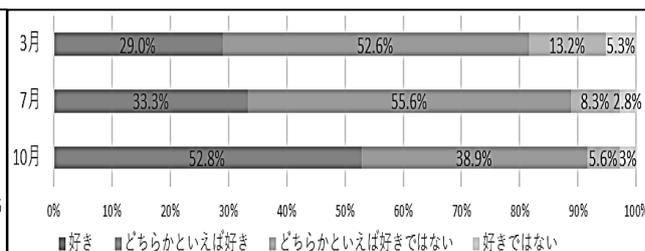


図7 授業の中でALTと会話をする事

外国語の授業に対し肯定的な回答をしている児童は 97.2%になり、100%の児童が授業に進んで参加していると回答した。コミュニケーションに対する肯定的な回答も増加していることから、「伝えたい」思いを高めることで、コミュニケーションに対する意欲が向上したとともに、外国語の授業が児童にとって「楽しい」ものになったのではない。

4.1.2 振り返りシートより

授業実践Ⅰの自由記述

第5時(単元ゴール共有の時間)

- ・友達のできることやできないことをはやく教えたいと思いました。
- ・伝えることを決められてよかったと思いました。レン先生に伝えるのが楽しみです。

第6時(発表練習)

- ・次の発表で友達のいいところをレン先生に上手に伝えて、覚えて帰ってもらえるように頑張りたい。
- ・発表の工夫をして、レン先生に友だちのことをもっと知ってもらえるように頑張ろうと思う。

第7時(発表)

- ・レン先生に友達のことを紹介できて嬉しかった。
- ・ぼくてきには、がんばってレン先生に発表できた。これでレン先生も友達のことを知ってくれと嬉しい。

授業実践Ⅱの自由記述

第1時(単元ゴール共有の時間)

- ・イーライ先生と早く勉強したい。好きな食べ物とか知りたい。
- ・イーライ先生に伝えるために、もっと英語をたくさん勉強したい。
- ・新しく来るかもしれないALTに、メニューを考えるのを、総合を生かしてやりたいと思った。

第2時(特産品の言い方)

- ・わたしはぶしゅかんやゆずが好きなので、イーライ先生に伝えることができたらと思いました。
- ・わたしは梨が好きです。イーライ先生にもとっても美味しい梨を食べてほしいです。

第7時(発表)

- ・イーライ先生から、「英語が上手」と言われて嬉しかった。
- ・イーライ先生に食べてもらいたい、知ってもらいたいという気持ちをもって、ランチメニューを伝えられた。

自由記述から、「伝えたい」思いが高まっていることや、ALTに伝える目的意識をもち、単元ゴールへ向けて意欲的に学習に取り組んでいること等がわかる。また、事前意識調査で否定的な回答をしていた児童Aの自由記述には、「話したい、知りたい」等、コミュニケーションを図りたいという思いが高まっていることがわかる記述や、「英語が楽しい」と感じていることがわかる記述が見られた。

4.1.3 授業後の様子より

2学期から英語を取り上げて自主学習をする児童が増えた。英語に対し否定的な回答をしていた児童も、英語の自主学習に取り組むようになり、授業を通して英語を習得したいという思いが高まったことがわかる。また、児童からももらったメッセージカードには、「外国語の授業がとても楽しかったです」「苦手だった外国語がちょっと好きになった」等と書かれていた。先述した児童Aは、「英語は1番目に好きなので、もっと頑張りたいです」と書いており、Aの外国語に対する意識の変化が見られた。

4.2 成果と課題

4.2.1 成果

○動機付けに着目して授業実践を進めたことで、児童の「伝えたい」思いが高まり、単元末の発表に向けた積極的な取り組みに繋がった。

○事前意識調査で否定的な回答をしていた児童の、英語を使ってコミュニケーションを図ろうとする場面が多く見られた。また、学年全体も同様、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする児童が増加した。

○外国語の授業やコミュニケーションに対する意欲が高まっただけでなく、英語を使って会話をする技能面の高まりにも繋がった。さらに、外国語の授業だけでなく、授業外でも英語を使ったり、自主学習で英語をテーマに勉強したりと、主体的に外国語学習に取り組む様子が見られた。

4.2.2 課題

●「伝えたい」思いを高めることはできたが、英語が「できる」という自信を持たせる指導には課題が見られた。児童の様子を見取ったり中間評価を入れたりすることで、児童の英語力を伸ばし、さらに成功体験を積ませることで自信を持たせることが大切である。

●外国語の授業に対して肯定的に捉える児童は増えたが、授業以外の場面で英語を使いたいという意欲の高まりにはまだ課題が見られた。外国の小学生や ALT 以外の外国の人等、世界の人と繋がるような体験を仕組み、英語の必要性を感じさせることも必要である。

4.3 結論

本研究では、「動機付けに着目して、他教科等との連携を図った単元を構築するとともに、指導の工夫や継続的な評価を行うことにより、児童の「伝えたい」思いに変化が生まれるか」という仮説を基に、授業実践や調査による検証を行ってきた。他教科等との連携を図ることで「伝えたい」内容をもたせたこと、「伝えたい」気持ちを高めるために単元ゴールの設定や共有の仕方を工夫したこと、高まった思いを維持するための指導の工夫や継続的な評価を行ったこと等が、外国語の授業やコミュニケーションに対する意欲の高まりへと繋がり、コミュニケーションの技能面の向上にも影響した。

こうしたことから、仮説に挙げた、動機付けに着目した他教科等との連携を図った単元の構築や指導の工夫、継続的な評価の効果を確認できたと言える。

引用文献

- ・文部科学省 平成 26 年度「小学校外国語活動実施状況調査の結果について」
- ・文部科学省 小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編
- ・文部科学省（平成 31 年 1 月 21 日）児童生徒の学習評価の在り方について（報告）
- ・文部科学省 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 国立教育政策研究所
- ・石川慎一郎(2017)『ベーシック応用言語学 L2 の習得・処理・学習・教授・評価』ひつじ書房
- ・大城賢(2017)『小学校新学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館出版社
- ・広辞苑〈第五版〉(1998)岩波書店
- ・佐藤美智子(2017)「主体的・対話的・深い学び」を実現するために「他教科等との関連した指導の在り方」大城賢編著『小学校新学習指導要領ポイント総整理 外国語』東洋館出版社 p.72-75
- ・中嶋洋一(2017)『能動的な英語学習のすすめ「プロ教師」に学ぶ真のアクティブ・ラーニング』開隆堂
- ・樋口忠彦・泉恵美子・加賀田哲也(2019)『小学校英語内容論入門』
- ・松沢伸二(2011)「英語教育評価論」石川祥一・西田正・斉田智里編『テストと評価：4 技能の測定から大学入試まで』大修館書店
- ・三浦孝・中嶋洋一・池岡慎(2006)『ヒューマンな英語授業がしたい！かかわる、つながるコミュニケーション活動をデザインする』 研究社
- ・柳瀬陽介・小泉清裕(2015)『小学校からの英語教育をどうするか』岩波書店